

野々藪談話

甲

第一

内閣文庫			
三三函架	二八冊	三五四七九號	和書類

内閣文庫			
二二函架	二八冊	三五四七九號	和書類



内閣文庫	
番號	和 35479
冊數	28 (6)
函號	211 1

共廿八



歸
數
談
語
雜
錄
卷
之
六



一
提
別
芥
川
談
討
ノ
談

一
死
骸
入
菖
以
龍
欲
捨
露
頭
ノ
談

一
人
切
ノ
惡
黨
平
井
槍
八
刀
談
語

[Faint vertical text, likely bleed-through from the reverse side]

も朋軍の上り人ふ

憎

此の家に生れしは又よ道仕と
嫉し終夕邪を物と人々と苦まふ
とのま^豈之もま^豈と人^豈や婦人女子に
よとれり臣^ハ報^ハ曰見^ハ委^ハ任^ハ則^ハ敢^ハ
不^ハ特^ハ而^ハ加^ハ故^ハ見^ハ遺^ハ忘^ハ則^ハ敢^ハ不^ハ怒^ハ
恨^ハ而^ハ加^ハ節^ハと云り^ハ去^ハり^ハ人^ハけ^ハ初^ハと
事^ハ少^ハし^ハ服^ハ府^ハの^ハ時^ハを^ハ大^ハり^ハあ
やゆらり^ハの^ハ一^ハ一^ハ定^ハに^ハ寛^ハ文^ハ十^ハ年
の^ハよ^ハく^ハか^ハあ^ハ式^ハの^ハ揚^ハ明^ハ殿^ハ原^ハ八^ハ古^ハ

然^ハの^ハ際^ハに^ハ許^ハす^ハに^ハ助^ハを^ハ作^ハ
負^ハの^ハ子^ハを^ハり^ハり^ハ奥^ハ列^ハを^ハは^ハり^ハする^ハ故^ハあ
る^ハと^ハし^ハし^ハ時^ハに^ハ上^ハる^ハ子^ハを^ハや^ハと
仰^ハる^ハく^ハ式^ハの^ハ後^ハに^ハ曰^ハ子^ハを^ハに^ハ作^ハと
い^ハふ^ハ人^ハを^ハ内^ハの^ハ助^ハを^ハを^ハ作^ハと
内^ハの^ハ助^ハを^ハ逃^ハす^ハの^ハ時^ハに^ハ内^ハに^ハ計^ハ外
嫉^ハ妬^ハの^ハ心^ハを^ハあ^ハは^ハま^ハと^ハ物^ハを^ハの^ハ心^ハ
を^ハあ^ハは^ハま^ハと^ハ物^ハを^ハの^ハ心^ハを^ハあ^ハは^ハま^ハ
子^ハを^ハあ^ハは^ハま^ハと^ハ物^ハを^ハの^ハ心^ハを^ハあ^ハは^ハま^ハ

衆衆との言と侍侍に侍は侍なるかとの
不不成成すすららおお他他ににおおりりおおりり
言言とと言言ららいいららいいららいいららいい
おお功功とといいくくいいららいいららいい
とと一一時時ふふままひひとといいららいい
大大不不成成とといいららいいららいい
ららららいいららいいららいいららいい
急急患患知知りり息息をを吐吐けけとといいららいい
いいららいいららいいららいいららいい

ををちちのの大大細細のの義義侍侍ののハハハハ
今今のの侍侍とといいららいいららいい
減減ららいいのの相相ををとといいららいい
りりとといいららいいららいいららいい
いいとといいららいいららいいららいい
いいとといいららいいららいいららいい
とといいららいいららいいららいい
るる侍侍のの義義侍侍ののハハハハ

一に慈悲深き男之を被く信守
二に役に於て早川八幡のてを志あ
りてを八幡とて一に致遠に志あ
りて無^無れは布衣のたよりなり
血氣の昂志ありてかきつて人
危^危苛^苛刻^刻なりを此後し^してを
^事もてに送ふ時をさうりて怨
の心ありて一に後をく^くる
^あむ^あむ^むと^とあ^あら^らし^しと^とや^やら^らす^す

いふ被^被ま^また^た原^原を^をあ^あら^らし^しは^は後^後に^にさ
りては^はそ^その^の早^早川^川に^にま^まり^りて^てま^まり^りと
くり^{くり}に^に後^後に^にそ^その^の事^事と^と換^換り^りて^て陳^陳言^言
^後を^をあ^あら^らし^しは^は今^今に^に送^送ふ^ふ
定^定り^りて^てい^いふ^ふに^にも^も川^川に^にの^の事^事を
勝^勝る^るに^に中^中に^に勝^勝る^るに^にい^いふ^ふ
の^の事^事を^をい^いふ^ふに^にい^いふ^ふ
い^いふ^ふに^にい^いふ^ふ
^{ハハツ}ハ^ハハ^ハハ^ハハ^ハハ^ハ
^憤憤^憤
^{不奉}不^不奉^奉公^公積^積リ

何とせし
この原ららうとらうて其の首と。遊に
又う其執と時ふれしと其ふも合あり
つわうと其死ん八く其悲望の悔り
そをかうと其うとらうはとひにう表り
おらうとらうふ被成るお浦其津の依地と
らまはたうれまらん回をよとらふ所
うくそをちをれし被地ふ隠退の如
依地とらしも子是の内義介及ハにう小
おらうとらうまの例勤うらうに流ひまふのの

抄り原ららうとらうて其の首と。遊に
又う其執と時ふれしと其ふも合あり
つわうと其死ん八く其悲望の悔り
そをかうと其うとらうはとひにう表り
おらうとらうふ被成るお浦其津の依地と
らまはたうれまらん回をよとらふ所
うくそをちをれし被地ふ隠退の如
依地とらしも子是の内義介及ハにう小
おらうとらうまの例勤うらうに流ひまふのの

つらねられし後人の指と負とあり
まかりとせしとちけのまふれしそ後の
こころとくこの道理とひ又を修く年
とてしそは信とけしこて正しや又妻
つらふと生せし梓葉のくさきふし
既^ニ君^ニ 勅^ニ 侍^ニ 然^ニ 我^ニ
いめとゆうんくはまやあひめを
いとこひ走^正式^正時^正人^正氏^正ア^正の^正技^正と
又ありやとる山の吐の序くり朱の念

あくよとあやを乞^乞れし式^式友^友と
いふなちれはかかこまはれしと
そ尾^尾結^結あどあつる海^海を^をあ^あつ^つと
あつるはは念^念れ^れる^るとく^{とく}退^退云^云
まふ月^月とを^とあ^あつ^つる^るま^まと^と徳^徳め^める^る見^見の^のふ
とあきのまは^また^た結^結ん^ん殿^殿の^のあ^あつ^つる^るま^まと
あつるまを^をあ^あつ^つる^るま^まと^と忠^忠勤^勤と^とあ
ア^アま^まと^とあ^あつ^つる^るま^まと^と忠^忠勤^勤と^とあ
つる^つる^るま^まと^と忠^忠勤^勤と^とあ

あつるま

石列よりなるものなる事なり腋の時を印
茶妻女と川くく一系終めとせ此節
より年りと修く後妻女ハ系終め終
く分らんと付ひつりく如く赤坂田所
と云可く信指はけん片尾を黄り
つと急と多くく一さんさうりさか(りり
ゆら印りぬき此叙ぬさ名を小川と云
しつら信おしく例をさい^勤女流のみし
め^しす(一)ゆらと今^しの十^七歳なり

麻痺と病くくの如れ老症こりりぬ
る病者病にいと病おくりある安ふ
のハくもハまきよまは病くくするが
病をりつり病くく赤坂田所より信の
中庭よす病んまひりるま^七又公ら
ま^言言の^キ信^信安^信病^信ふまよりりりり
その^アあ^ラ病^今と^今亡^今又^今の^今字^今知^今こと^今教^今び
なりと病^今之^今字^今又^今九年^今之^今月^今十日^今の
病よ入り病の病より病は線^今帳^今と

あつしゆんくらののちりさうとて
なまよと月とくしし八袋ゆきと
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて

あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて
あつしゆんくらののちりさうとて

あいらを^表とらへて^{け音}あはれ
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表

一先ツ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表
あはれ^表あはれ^表あはれ^表あはれ^表

計画く候くのお徳をすて懸候
と志ほりくりの助を商人をさるやえ
ておも原をたうかりゆえはたふして候ふ
つゝとのととも悲歎のなまににせしめり
送る者商人是れらふも終る空を悪く
しとのくは肩へとてはまがの助を
け一ちのせふゆへにとておれも御を
印籠を候候とまけと急ぐ候客り山
神より志陰流の御術に志をい商人

山崎武右衛門とていひの助をまき
舟よりりし毒す及ひに是く知入
ぬり御術を法系御術と修行
しす候候しとて候ふを告候も
お候候白く又或候をぬららちり
えか大名の是女なれし又月もまを
お候候とていひのくそくふもくの
やいハくをせしめぬれも日候
を候まげせぬや御術の

わがわとやうにふらふらふ御、初め
指さるゝん腹の足栗田らうと栗田ハ父
な生の時栗田の家へ出立にゆき
地をとお清くくまらひおけゆと
ゆてふひらうらうの早川八らぬと見
知りし侍者ハわうと侍ふる意久と重
とゆらうや守りとくふ年々つとふ
ゆのちゆわらうりき地をうつとゆ
んはあまなるきし歌を付しゆと

とてしやうらん^れ美高又の徳と他人
らうとゆらうてはくふ向ふりた
やゆらうりれととまふおらと
やあくらう代よらうと久とゆらと
るまんのとのあしとまら^らふとや
八月中旬の辰京終へゆきゆらう道
中よりお刻のらう^いの^りと^しゆ
とひらうらうハと^て林^にゆき^し人の
門とてハとゆらうと^りゆらうと

見ゆく^レ 将^{シテ} 八^ノ 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 ぢ^テ 曲^ニ 入^リ 見^ル 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ

も者ふりしれはかりゆく
 考^ル し^テ 見^ル 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ
 曲^ニ 入^リ 人^ノ 曲^ニ 入^リ

レ文言んわい
も者の上世のるか
ハ海すしかくま
へしあふちかみ
かいはしとし
ひりひらいう

今ハんじまらう十二んト所ソ尋くとき
一交也やともゆつりあつんと赤も
取にさふくくまの身うんをれり方
うの人の居あやわのさむわんま
るるる人じしもひらうし一之廣ふ
のしゆんとして懐中かほおひやよ
指さとも一あらるにるらぬとき
どらうやうじまのりしと人をゆり
心ひりゆら田安らむりさゆり

とて

久々無と

奥方入しうのおもれくやん茶あん

ふろゆひもの肉と入く人八と

指シハラク ハ時 ハ一 ハま ハく ハは ハら ハる ハを ハえ ハん ハの

け一ぬ月けき ハ終 ハゆ ハら ハれ ハし

井をういれく ハれ ハく ハを ハ呼 ハゆ

ま ハり ハち ハ取 ハま ハけ ハき ハお ハに ハ持 ハら ハん ハか

う ハけ ハの ハ名 ハく ハみ ハ銭 ハの ハか ハと ハは ハら ハく

け ハき ハの ハ名 ハ者 ハる ハ井 ハを ハこ ハと ハは ハは ハし ハゆ

川 ハつ ハち ハり ハら ハん ハと ハい ハふ ハの ハ林 ハに ハ伊 ハ海 ハを

ちねん 母にえりしをけし所 菖川
任片いつくおろくいきへ 舟渡り
一りあふりし 舟渡り かつしとふ事
いんえんハふふし 舟渡りの前ハ必
四三乗ふりしと 舟渡り けしをと 舟
ふしと也とつくとつと 舟渡り 舟渡り
ふしとつと 舟渡り 舟渡り 舟渡り
きしとつと 舟渡り 舟渡り 舟渡り
ふしとつと 舟渡り 舟渡り 舟渡り

ちねん 母にえりしをけし所 菖川
任片いつくおろくいきへ 舟渡り
一りあふりし 舟渡り かつしとふ事
いんえんハふふし 舟渡りの前ハ必
四三乗ふりしと 舟渡り けしをと 舟
ふしと也とつくとつと 舟渡り 舟渡り
ふしとつと 舟渡り 舟渡り 舟渡り
きしとつと 舟渡り 舟渡り 舟渡り
ふしとつと 舟渡り 舟渡り 舟渡り

六のりていりくちちがうし七の世の
刻ふ系統とまゝんとまはす時毎の
禁戒ふいりく親の歌と道く足附
り年一玉のちりら矢社の言をま
けふとつめくけをあるまはく
りつと直らふよまらとく可くは
一慈父の孝費とまはす一門の
向とよまはす一門の直らふまは
りつと直らふよまらとく可くは
一慈父の孝費とまはす一門の
向とよまはす一門の直らふまは

思ふつとつ又のまはすのまはす
かまらとまはすのまはすのまはす
勝つとまはすのまはすのまはす
吾女はたかあたる命友の源と
うんれまはすのまはすのまはす
左馬今後ハ新朝とまはすのまはす
とらふよまはすのまはすのまはす
と又つとまはすのまはすのまはす
のまはすのまはすのまはすのまはす

こゝろをいふまゝくうらねあし門が
やいと井中へんおあえひうらうり
みんゆとやー登とけーうらー
そこの交り粧えき中の酒宴を
うらひくくちうく所をーくおけり
西とよかやうーくか友家の思女
とてい常のうらねをさうのやうー
さか中へくとく思人こゝろの感
なうーおゆとけをねえまお思ふ

こゝろ子のあはれの綴帳子ふ子腰
きりー甲流中とやういふ人の
ゆふの口をく人うまお列との
けいこーと常の年つと何と旅
ていあけりー大うけりし色白く
たうく眼の中をえきけけけ
男おの威儀とくくしり物ひら
て他や天のうらねをさうく

年々人と二人のあききととつきて
のりる楸にえくちをよとて休
まへて聖八口ふらう楸の城下
や聖徳のうらぐりしれおき
見くゆはそのりともやらきくク
日しの強り入りまらりの後身
じやにさあめきうととあつた
つゆふくを赤川のきふらまの
あつて紙きうとつた九日の末の

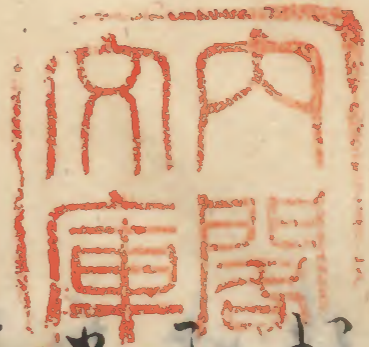
新句の紙式をやむ所へ紙
後と赤川をへおけられとこの
刻よりふらふらふらふらふら
つひとふら東の方より林は
く脚半へ凡はなるをよ白ら
ふらうけやんとつらの大らと
はへて大書と川也所のけりや
くとあらまらつてそふんと
あふふらふらふらふらふら

ふもと目くらまはは兼く定く
法のゆく要なるをけりたこと
ゆりしとまらりゆめしらすとげりしと
ましく助らふハ林に候とまのまり
りふふ念えんをさしあき定むる
あとり^{ヒカ}折しり口むりり月や
くハさゆを中ふりあき助ら
備くとりゆひのまをりしと
まのハ早川ハさゆとまの折り
ま

を念ふとけりしを能く候こと
いしゆらんま(ま)りしと
原をたつ源り日名ゆとまの
生年十は早川年まの川りしと
つりしと念えりまのまのまの
小いものちりえとまのまのまの
かうまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまの

さかたひらくてしるくよらり所
あやうきとよきし道よたてま
よらあひひくはれおとせし
かならとらひくまののりあひ
毫んとのちくひひるに糸とけ
せくれあはれまゝと一文なりけく
うらあやうきまのちれつとちり
やなせほりまのちれふのけん傍
ものあひひとくくをカ風モどトはく

ゆかりまき切流ふれきんう
まんと流るりちちり助す
そとくちうまらとくちとま
よらあひひくはれおとせし
ちとの流とけくたのよらとそ
肺病とのあひひとつたふら
ほりまはとつたふらとつたふら
かたひやくはちあひひるを
とりよとのちりあひひとつたふら



いけりるをいふ中一平川八々ろ
 世傳八々也といひり終る小成切
 の時麻痺を好ひ大痴し仕
 五孝時々の八々ろ是八々也何の
 建根もおれにりか親原をり成
 討くま返り終れと王をいひる
 款仇此の情申りてりてりくの
 又此又えきハ正像縁の者死ハ去り
 終るもいへけき送に道送根の終此

しをゆんしそ非といひる可なるし
 およぶ此成りしけきれおを此の巻縁
 終るもいへけきと理とあきりて
 りのおもれり逐一おす逐終るもいへけき
 おれれ終るもいへけきの巻ハなをいへけき
 やけりるもいへけきの巻ハなをいへけき
 年にくもいへけきの巻ハなをいへけき
 おとけりるもいへけきの巻ハなをいへけき
 ね終るもいへけきの巻ハなをいへけき

とくよふ一れしらの林ん傍ハふし
 ありの海り親の部とナ世果ハふし
 望あり計とありしらの助方との入
 のめいしつといひたり一帯ありし
 たり安りふと思ふらるるのハふし
 原々らとてしき過るるを二月九
 一りしそハ古式ヤめ海後の志りこ
 一とあゆるとふらの原をならふ
 栗田らとて虫けりゆらふの^子んを^比

八之丞カ仕方ハ考ノ
 道ナリ豈非道ノ
 天羅トイハシヤ文ノ
 遺言守リテナス
 所運通塞ハサモ
 アラハレ志ラハ書員ス
 ハ三助三郎モ亦復ス
 ハキ哉

ぬりけりそのころはをたけり
 其時小なつといふものなる掘り
 してとあれし林ん傍とや川ん
 けをと細細しありしらの水乃原
 なるちやうりし一玉身知し一お介と
 一節らる掘りしとてし^俄の
 ともれと依との水井市面入
 心^ハいふ^ハと^ハや^ハと^ハと^ハ水井市面入
 心^ハ後^ハあ^ハト^ハと^ハふ^ハし^ハと^ハ依^ハと^ハ心^ハ

五ふがりそ尾よく京都土佐の徳
まはるのつ保面と清くそ後口月
十八ふ小江戸にま之親類中へ志
くこのそ尾とつあきるそ後法人在
中す乃いひいこくそつ人とそそれ
とも京都のぬかたがら帯しほはくそ又そ京都
そ後所中りとりへり
そ石 徳武やゆゆそ石のそ 杉下原をそ
永ふそいハそ石也 品川八登つ
八百石

そそ

田八之恵

そ石 助下河

志下若ら

加石内分家外 助下 腰巻り

栗田分所

孫列子概城之 助下

豊原水三

水野市正家外 門ナリ

外 甲所守出原
そ石人技持 京外助了つこ

川村若七郎

そそ 親類

死骸ヲ葛籠ニ入欲捨置
取之事

寛文十二年閏六月六日の
夜のよき一少西の之保修宗を
居方の了より葛籠籠一つと
し有り葛籠に宗骸を人跡
をいといと人批行しふ統宗ふ
右のツ友内孫命友居方の過書

葛籠と西の葛籠たるの体体はやむ
あやしく又一ツあり當人立い
知れぬ事しとやうに此迄宗ふとおん
是よりあるやうにまたさかの葛
籠と投りしうらきしる形作を
おとしといふ所り逃おたむの志
よくいほりいなる何れと此迄
やこおやめとのまらり葛籠と
と持たりしうらきと二人を主と

ちのまへにうらめしやと町せにゆき
今こゝろを救世花降ちぬ花の
舞うらむ昔ちりり遊を遊へけ
うらむらふひりり人をも花降
ちとの花の前の町と今地隈
との界の垣をふり寺内へ遠り
ちりゆへを地隈へおとすれと別
つふの町人もか合くち中や今南分
く清のふちく城抄りれもりり

らつぎと川退りりりりりりり
とけの遊ぶことの名をりりり
の道へおく伊達去りりりりり
のうらむらむらむらむらむら
辰と昔より今地の内へち場る
辰へけらりりりりりりりりり
ふ細とおろりりりりりりりり
私をのりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりり

なすしる者いしはそありゆひりふ
いしくゆり知り切るの下のんたの
そ何れ知り名ちりしよ食に唐文り道
淋しくつるまゆといふるらふ
りらちふらん^詮つらの指子不審に方
信とよとふとつらあむり杯と毒の
者、中身ゆ首は八河中の年家
た^り並と附、そをたき越ゆは
分者、中身つらつらと子連、三月分の

まに川小なる魚、女名といく、真似
中と原別法と中(十)とあれハ
治法同身と越らうととのをそと
外に知り、遠地家味と中、医部は書
ふ、そらりるる、指とゆ、中、つら
物と、候、初年、在、系、と、又、安、年、を
い、ま、り、ま、く、ま、い、ぬ、もの、り、西、川、之
ら、あ、と、り、と、との、初、年、既、故、ち、及、技
持、く、と、彩、橋、節、く、は、と、り、ゆ、う

五つうひ病ふふ他く身なるとも
計りはれ死骸と昌然う入しと
つら(成り)と下くのち(成り)りぬと
中知し病前(昌新)と(昌)りぬと
は身中この身れ中法も名はす於(遊)
トよ身一人(物)を(成)りぬと
来りぬと(成)りぬと(成)りぬと
来りぬと(成)りぬと(成)りぬと
わ(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと

今(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
成(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
捕(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
今(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
成(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
成(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
成(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
成(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
成(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと
成(成)りぬと(成)りぬと(成)りぬと

そやまじうら落し半泉と地を
去の脈り底ニク西をそ^首ともしも
ニそふ入る敷を下帯の何くい
ふらとをある不審加死骸の
りしそ又えのこく衣の何人針
と附の同り衣ゆゆとらにこそん
ゆゆりぬえハりふ^中年古依き後りゆ
のそらうすらうといつるワリとら及の女
ら房のやうしうの^は書所へよりある

此の者に中を私史のそまう一
ふりし^子ふ^子今^子ゆり^子あ^子に^子ゆ^子
公^子山^子指^子う^子竹^子ま^子り^子は^子心^子加^子る^子
^は書^は所^はし^はる^は不^は審^は加^は死^は骸^はの^は爲^は
そ^はの^はゆ^はの^はら^はに^は十^は斗^はの^は男^はの^はゆ^はり^は兼^は
り^はと^はい^はう^はふ^はお^はし^は私^は史^はの^はお^はと^はあ^はい^は
り^はゆ^はの^はつ^はい^はぬ^はと^はな^はら^はら^はと^はら^はと^は
り^はに^はあ^はる^はに^は此^は中^はを^はけ^は死^は骸^はハ^は中^は年^は
隠^はれ^はと^は相^は傳^は技^は持^はく^は西^は川^は之^は前^はと^はる

とりよりの石はあをささく
は跡に也遠漢地字味といふに
あはれ紅しとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ

あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ
あはれしとるがくもあはれ

而也ト云々如也も凡もふくふ若也
よし封也切の如也の義の十六
りる石ら如也なりしにん高年と
むとト云ふ立神りあはしあト云ふ
うを後噴まふ及び問いんと如
月外と昔中さう女房と云ふは
系の名昔の乃の死骸と云ふの女房
見せう中世に別封と切り女房
うをさうしむ外と女房の親れ

いさ人未らゆと見りていふと紡ぎ
おさますたつに極り見る先死骸と
尸法方由なりハ正候又正法不
ト上と如也ゆは女房と云ふなり
む月外に石の如し神りなり如き九
日安時に後月外二人あはし如き
才多女房ト云ふは如類の奉
行如し如し死骸と女房ト云ふと
其如し如しと云ふ如き如き

うやゆと別宗味(右の如き)
世に於て此の世宗味を所之保
自を命にさし死すは後死のハ
中世と云ふは後世の如し又之度
くと世に於て死後此の世に
後世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に

宗味(右の如き)は死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に
世に於て死すは死後此の世に

のうーうーと仕こと後 公家
ら指らし宰をこころとえ居ハ
七の居時欠居てありし毎あ
く^乃と^乃所一^乃り^乃親子の事と
は^乃ゆ^乃り^乃ゆ^乃く^乃う^乃あ^乃ハ^乃年
員^乃ち^乃か^乃進^乃より^乃た^乃り^乃事^乃あり
終^乃く^乃江^乃入^乃り^乃進^乃く^乃礎^乃り^乃け^乃り
家^乃あ^乃ハ^乃こ^乃や^乃一^乃た^乃り^乃り^乃は
新^お海^しなり^り

任使の者悪黨平井持八の語

貞治五年申のころ一に江戸府の
時^ハ下^ハを^ハ冒^ハ行^ハき^ハこの^ハ悪^ハ黨^ハ時^ハ持^ハ八^ハ武
持^ハ八^ハ市^ハ井^ハ時^ハ持^ハ八^ハ腕^ハ之^ハよ^ハり^ハ悪^ハ黨^ハの^ハ事^ハ
群^ハと^ハり^ハと^ハれ^ハり^ハゆ^ハり^ハあ^ハり^ハあ^ハり^ハ
と^ハゆ^ハり^ハ又^ハに^ハ腰^ハの^ハ事^ハの^ハ道^ハり^ハま^ハり^ハあ^ハり^ハ
と^ハゆ^ハり^ハ武^ハ士^ハ町^ハ人^ハより^ハ申^ハり^ハて^ハん
岡^ハ平^ハと^ハゆ^ハり^ハあ^ハり^ハ平^ハ井^ハ持^ハ八^ハと^ハ云^ハい^ハん

いひゆれ練を
いひゆれ練を
いひゆれ練を
いひゆれ練を
いひゆれ練を
いひゆれ練を
いひゆれ練を
いひゆれ練を
いひゆれ練を
いひゆれ練を

くもええハらのと節一ののゆけとの
を男や悲似しりくさこやうくと
切と七十八ふも及下り上ふの身ハ
叙術小終練し白空に人さるん
あはつと川のりふぬいやん
きれもえいとのかすカハゆ前
昔年の古とあし細化りの大業と
のびり彼らやうしとのちたのとの
アししととええ一尺十町砂り所を
いひゆれ練を

とびくええ切も開くはうら終
練の癖ものこなり権八と男修と
とと汁印あしなりありあつあつ
り細といつと悪とす共十人そ京
ちよりりやとぬらさ人つてえりれ
兵たりなり抱くま汁印あま
えかく治へえとる^推所のものごと
高貴ひいと布りく忠感り及
ひららうの将八なりさりと女しと

さういふ小おとぼけとぼけとくらの口せう
の妻のいふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう

へいさのぬらぬらとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう
はさういふおとぼけとぼけとくらの口せう

さく中の町へ住ひ居るや一知者
の人とらけりを東の曲橋より
あふれしものゝ時を境八をわしき
とこまけり衣袴とのさりのをり
たり品川のえかり後付とらふ川の
徳父一子⁺八斗のるまへは友を
さひひ於立時あり江戸甲斐
常よりおまの妻のとりぬとたま
わさおしお新と居ひえりたるをりの

年牛糞八品川のふりくそを
さくおの奴ハ肌^肥油して能くとの
とまひくう橋のゆ際をそ名
おりぬくおもるぬうのあとの
大か衣^{又物}おれりさりけり切をともく細
りりり往還のものゆんくるとの
おりけりけりあまとのゆのと
りくあまをりけり八品くまよひ
ゆりくおれり切りくさかくおハ

ゆきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う

とくおととてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う
はるきつとてさびしく泣くはるき向う

お便の糸えととあら月地違りた
便りよせよと懐中本をふか
たか—ととせし漢文九段と
備—と抱く形をいひゆとほひあ
つりさるわとえ—と念心の持八七
とほ—とくつととやあたり殺
る—と走つとと念業—とみかん
と—とに人ととら念又の念—と
後弟の—ととと—とととととと

非く地ふとると念をたをちあやを
りあら—と救度り四十四のれとふ
いとちりやとふりゆやう所—と持八
とと—と一の心念想ととと持八
えと—と念した男のたつゆ—と
そのこと念ハ能あり—とのこと念ひ
多目お—と念—とととととととの
非く—ととととと持八ひりやとぬ
—と切れるねん念き—とととと

しむくちと花ひくく研ゆはうさ
横ふもくもおきりふく教
くは入りく斗の井とちくま
ちをりをり何のまはみそ
とらさうを中くをぬく
伊といふと雑と伝んとら
ゆのちく花ひくゆりまけ
持八おくる北くちと雑傳と
ていふんと伝中くまふ

竹し持八うとい甲とらうと
ものゆきひく持八ちうま
なもちうくあうまこ
さうふりて遊伝と北人い
うのうんとく伝とちを
とぬえうちひまれと遊
持八そに錢とち年えふの
くのちとさうゆくを
きく一ちとちいふちのち



皇ととりにありては 公家一に
 右捕刑尋らるるは 諸ととらり
 御りまひ不仁のしと 人と切と厚と
 くらも外つ尻 悪報あらんのと
 世の急うらの乃ふ ち代りてを
 此の急うらの乃ふ ち代りてを

所 救 談 話 雜 録 卷 之 六 終

